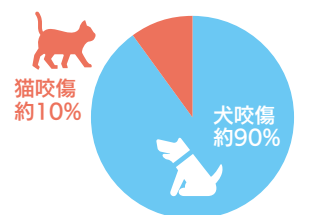


動物咬傷



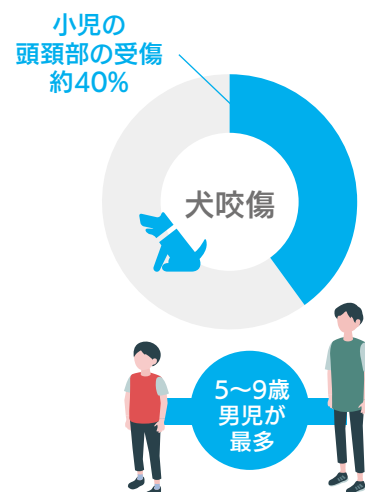
1. 疫学

動物咬傷の中で犬咬傷が約90%を占め、猫咬傷は約10%程度を占める。
また犬、猫以外のペットによる咬傷も近年増えている。
犬咬傷は5歳から9歳の男児が最も多く、
小児では頭頸部の受傷割合が約40%を占める。



2. 病態

犬は噛む力が強いいため組織損傷が大きくなりやすく、
猫は犬歯が鋭いため深い刺創となって深部組織の損傷が多い。
犬咬傷と比較して猫咬傷の感染発症率は高く、
特にPasteurella属やCapnocytophaga属が問題となることが多い。



3. 応急処置

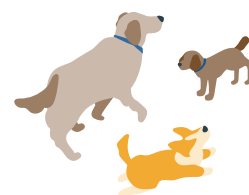
動物咬傷は通常の創傷と比べて、創部感染のリスクが高いため十分な洗浄を行う。
創部の処置は二次治癒が基本とされるが、
特に顔面では整容面での障害を生じる可能性があり、場合によっては縫合を行うこともある。
創傷処置については、可能であれば形成外科医と相談するのが望ましい。
四肢の咬傷や猫咬傷、縫合処置を要する深い咬傷では感染予防のため抗菌薬の投与を検討する。
破傷風予防として接種から5年以上経過している場合はトキソイドの投与を考慮する。

4. 予防・啓発

- 短時間であっても子どもと犬を一緒にして放置しない。
- 犬を室内で飼育するときには、低月齢児はベビーベッドで寝かせる。
- 中・大型犬やジャンプ力に優れた小型犬の時には、ペットゲートやサークル、ゲージの使用を考慮する
- 子ども達に対して、家庭や学校で、犬咬傷事故防止に関する教育を行う。
- 狂犬病予防法に則り予防接種・登録を自治体に届け出る。
- 飼い犬の咬傷を届け出る条例を定めている自治体もあるため、確認する。
- 動物咬傷後にPTSD症状を呈する子どももいるため心理面のサポートも行う。



低月齢児は
ベビーベッドで



ペットゲートやサークル
ゲージの使用を考慮

- 参考文献
- 1) Ellis R, et al. Am Fam Physician. 2014;90(4):239.
 - 2) Talan DA, et al. N Engl J Med. 1999;340(2):85.
 - 3) Dowlwell T, et al. Cochrane Database Syst Rev 2009 Apr;15(2).
 - 4) Jaindl M, et al. Wien Klin Wochenschr. 2016 May;128(9-10):367-75.
 - 5) Peters V, et al. J Pediatr. 2004 Jan;144(1):121-2.